

学部留学生のためのレポート作成指導のために

—— 2005年後期全学日本語Ⅲのデータから ——

多田 美有紀

キーワード：学部留学生、書く技能、レポート作成

1. はじめに

学部留学生は入学後、日本人と同じように講義を受け、研究室に入り、卒業論文を書いて卒業する。それだけの日本語能力があると判断されて入学しているのであるが、専門教育の理解を助けるためにも、入学後も日本語教育は必要であろう。三牧（1995 p.19）も「講義をはじめレポート・試験・ゼミでの発表などは通常日本語で行われるため、専門日本語^{註1}のニーズは非常に高い」と述べている。しかし、一年次の日本語の授業は他学部の留学生との混成クラスであることが多い。留学生は学部ごとに異なる日本語基準で入学するため、同じ一年生でも留学生間で日本語レベルに差があり、また会話が非常に長けていても書かせると意図が通じない、というように留学生一人ひとりの日本語の四技能（読む、書く、聞く、話す）の能力にも差がみられることがある。こうした学部留学生を一つのクラスで教える場合、何をどう取り上げるのか、どこまで教えるのかを考えるのは難しい。

筆者は、四技能の中でも特に書く能力の向上に関心を持ってきた。一般教養科目や専門科目の授業には、レポートを課し、それにより成績評価をするものがあるからである。また、卒業論文が必修の場合は、卒業論文を書き上げなければ卒業できない。金森（2005）は上級レベルの日本語学習者がレポートを書く際の問題点として、①レポートに求められているものが分からないため、レポートとしての基準を満たしていない、②文章としてまとまりに欠けるため、文法的には間違っていないのに分かりにくい文章になる、③文体の差を意識しないため、レポートらしくない文章になる、④単純な助詞の誤用や漢字の間違い、または呼応の不備や文のねじれがある、の四点を挙げている。これらの問題点は、筆者の担当してきた学部留学生についても当てはまる点であり、こう

した問題点を補強していくことが書く技能の向上につながると言える。

本稿では2005年後期に筆者が担当した長崎大学全学教育日本語Ⅲで学生が書いたレポートをもとに、学部留学生に対するレポート指導について考えたい。

2. 全学教育日本語の授業と受講学生の概要

授業は1日2コマ（1校時と4校時）行われ、1学期に15週（15週目は試験日）ある。1コマは90分である。一年生の学部留学生に向けて開講されている科目であり、曜日によって受講できる学部が決まっている。しかし、二年生の学部留学生、大学交換留学生、英語による短期プログラム学生等については制約がなく、どの授業も受講可能である。

学部留学生は一般入試、私費外国人留学生特別選抜どちらかの試験で入学している。一般入試は大学入試センター試験と個別学力検査などを、私費外国人留学生特別選抜は日本留学試験と個別学力検査などを受ける。

3. 本授業の概要

本授業は学部留学生（以下、学生）が今後大学で勉強するのに必要と思われるレポート作成、発表の能力を向上させることを目的としている。そのために、日本で今話題となっている出来事で学生が意見を述べられそうなものを新聞やインターネットの記事から選び、レポート作成と発表のきっかけとする。記事は学生がさまざまな視点から考え、意見がまとめられるよう、一回の授業で二種類取り上げた。二種類は同じテーマのもので賛成の意見と反対の意見、というように、一つの出来事を別の角度から見ているものを選んだ。どちらもA4で1枚程度の分量とし、多い場合は少し修正を加えて一枚に収めた。二種類の記事で分量が少ない場合は三種類にした。

読解はレポート作成や発表に必要な時間を考慮し、二週に一度行った。記事には普段あまり使わない語彙や表現があるが、二週同じテーマを扱うことにより、主要な語彙や表現を理解し、考えを深め、意見をまとめやすくなると考えたからでもある。扱うテーマは回を重ねるにつれて、より身近でないもの、抽象的なものを取り上げていき、内容的にも難易度別になるように配慮した。また、2005年後期は受講生の多くが経済学部の学生であったので、経済的な切り口で扱えそうなテーマを2回のうち1回は取り上げた。

レポートや発表の課題は2つ以上出し、学生が書きやすい、発表しやすいと

思った課題を選べるようにした。ただし、どの課題も意見を述べる課題にするなど、課題によって別の論構成にならないようにした。

以上の点に留意し、次のような流れで授業を行った。

- 1 週目：オリエンテーション。二週目から行う授業を1コマで2コマ分行い、来週からの授業内容の流れを把握する。
- 1 校時……①読解（約30分）、内容の確認と内容についての質疑応答
 - ②レポートの書き方の説明（約20分）、レポート作成
- 4 校時……①発表方法の説明（約20分）、グループ分け、発表準備
- ②発表
- 2 週目：1 校時……読解（約1時間）、内容の確認と内容についての質疑応答
- 4 校時……レポートの書き方の説明と練習（約30分）、レポート作成
- 3 週目：1 校時……発表方法の説明と練習（約20分）、グループ分け、発表準備
- 4 校時……発表
- 4 週目～13週目は2 週目と3 週目を繰り返す。
- 14週目：1 校時……読解（約1時間）、内容の確認と内容についての質疑応答
- 4 校時……レポートの書き方の説明と練習（約30分）、レポート作成、授業評価

偶数週の4校時はレポートの書き方を説明する前に二週間前に書いたレポートを返却し、フィードバックを行った。レポート作成の留意点を説明し、簡単な練習をした後、レポート作成をするのであるが、レポート用紙にはレポートのアウトラインを書く欄を設け、論構成に留意できるようにした。アウトラインは評価の対象としなかったため、書いていない学生もいたが、アウトラインを書いたほうがレポートを書きやすくなると何度も言ったので、大半の学生は書いていた。

奇数週1校時の発表の準備の前にも二週間前の発表の評価を返却した。その後くじ引きでグループ分けを行い、グループで発表課題選び、発表のアウトライン決め、発表原稿作成を行わせた。発表時は、他のグループの発表を聞くよう、発表評価シートを書かせた。5週目までは評価とコメントを書いていたが、数字による評価は難しいようだったので、7週目からコメントのみを書く形式に変えた。

提出されたレポートや授業で行われた発表の評価は筆者のみで行い、それらを成績に反映させた。レポートも発表も授業時間内に作成、準備を行うため、内容、書き方、発表のしかたなどを評価の対象とした^{#2}。ただし、内容の理解が困難なほど文法の間違ひが多い場合は評価を下げた。

各授業で行ったことを以下の表に示す。なお、課題は多くの学生が選んだものとそうでないものがあったが、選んだ課題によって評価が偏るということにはなかった。「読解」欄が空欄になっているところは発表の週である。日付の下にある「～回目」は、テーマを扱った回数である。

表1 2005年後期全学日本語Ⅲ (彦田)^{#3} 内容

月 日	読 解	学習項目	課 題
10月 3日 1回目	衝動買いを誘 導する	・普通体で書く ・です・ます体 で発表する ・難しい言葉へ の配慮方法	①衝動買いの経験 ②母国と日本の商品の売り方の違い ①今売られている商品であまり売れてい ないもの、もっと売れたらいいと思っ ている商品売り込む ②衝動買いをさせるための工夫で効果的 でないと考えたことと改善の提案 ③衝動買いをしてよかった例とその理由
10月 17日 2回目	・睡眠覚醒リ ズム障害 ・バーチャル だけじゃな い	・話し言葉と書 き言葉の違い ・長文を書く時 の注意点	①自分の生活で不健康な点と今後の対策 ②電話とメールの使い分けとその理由
10月 24日		・グループ作業 のしかた ・発表者が変わ るときの注意 点	①子どもの頃からインターネットを使わ せるべきか。理由と長所・短所も説明。 ②体を壊す可能性がある趣味の長所と短 所。そのような趣味と健康を両立させ るための提案
10月 31日 3回目	・揺れる成果 主義 ・社員の発明 の評価	・似た表現の使 い分け ・各段落で書く こと	①物売るのが目的の企業での中年社員 の評価方法とその理由 ②アルバイトの能力給の評価方法とその 理由
11月 7日		・引用のし方 ・分かりやすい 話し方	①年功序列の長所と短所。企業にこの制 度は必要か。 ②研究職の評価方法

11月 14日 4回目	<ul style="list-style-type: none"> ・「脱ニート」試練 ・'05「選択」考 	<ul style="list-style-type: none"> ・接続方法の使い分け 	<ul style="list-style-type: none"> ①若者自立塾が短期間で成果をあげるための提案 ②ニートを減らすための企業としての対策の提案
11月 21日		<ul style="list-style-type: none"> ・長文の読み方(区切り) ・段落の分け方 	<ul style="list-style-type: none"> ①ニートを防ぐために学校がすべきプログラムやシステムの提案 ②新卒者を優先的に採用する日本のシステムについての意見
11月 28日 5回目	<ul style="list-style-type: none"> ・踊る「食」と「健康」情報 ・サプリメント 	<ul style="list-style-type: none"> ・文末表現、助詞相当句の使い分け 	<ul style="list-style-type: none"> ①サプリメントを上手にとるための情報収集方法と購入方法 ②視聴者をひきつける食べ物の情報番組
12月 5日		<ul style="list-style-type: none"> ・引用文にある難語の扱い方 ・長文の読み方(強調) 	<ul style="list-style-type: none"> ①店の経営者の立場から、テレビや雑誌に取り上げられていないサプリメントや食品を売り込む方法 ②あふれる情報と上手に付き合っていく方法
12月 12日 6回目	<ul style="list-style-type: none"> ・所有しない社会 ・環境負荷の少ない生活実現 ・リサイクルのコスト 	<ul style="list-style-type: none"> ・結論の書き方、引用のしかた ・擬態語に代わる言葉、接続表現の使い方 	<ul style="list-style-type: none"> ①所有しない社会で予想される問題点とその解決方法 ②耐用年数が長いものを売る場合の企業の儲け方 ③環境保護のために今後すべき取り組みとその問題点
12月 19日		<ul style="list-style-type: none"> ・読み方に気をつけるための原稿の書き方 	<ul style="list-style-type: none"> ①まだ家電が使える状態でも、毎年売り出される環境負荷の少ない家電製品に買い換えたほうがいいのか。 ②レンタルしたほうがいいのか、所有したほうがいいのかとその理由
1月 16日 7回目	<ul style="list-style-type: none"> ・暮らし守れぬ重伝建制度 ・幸せ大国をめざして⑨ 	<ul style="list-style-type: none"> ・結論の書き方 ・事実と意見の書き分け ・分かりやすい説明のしかた 	<ul style="list-style-type: none"> ①重伝建地区は建物が保存されるだけでいいか、住民の立場か行政の立場から意見を述べる。 ②観光地でない街は町の発展のために個性を出すべきか、チェーン店をふやすべきか。 ③長崎市で「社会的弱者」にとって不便な点とその解決方法 ④町並み保存地区である東山手・南山手地区を住みやすい町にするための対策

1月 23日		・今までのまとめ	①客が減った駅前商店街が生き残るための提案 ②社会的弱者が不自由なく買い物できるようにするための提案 ③古い町並みの維持と住民の快適な生活の両立のための提案 ④景観保護と人口増加に対応するために建てるべき住居の提案
1月 30日 8回目	・惨劇と向き合う ・個人情報保護法	・今までのまとめ	①報道被害者を作らない報道ルールの提案 ②報道被害者を守る方法の提案 ③個人情報を守られていない例とその解決方法の提案 ④病院が報道関係者に個人情報を渡す基準の提案

4. 受講学生と分析対象学生

本授業を受講した学生は22名である。学生の内訳は、学部学生は19名（全員中国）で、うち、工学部1年生は2名、工学部3年生は1名、環境科学部2年生は2名、経済学部1年生は14名である。学部交換留学生は4名で、うち、05年春来日の教育学部学生は2名（2名とも韓国）、水産科学部は1名（中国）、05年秋来日の教育学部学生は1名（ベトナム）である。英語による短期プログラム生は2名で、2名とも環境科学部所属の中国の学生である。

分析の対象としたのは8回課したレポートをすべて提出した経済学部1年生10名で、全員中国人である。9名は一般入試により入学している。

5. レポート評価の変化

5-1 評価の変化

レポートはA+～C-と0の10段階で評価を行った。表2は回ごとのその評価を得た留学生の数である。その評価を得た学生がいなかったところは空欄にしてある。

表2 回ごとの評価人数

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	8回目
A+								
A				1		1	1	3
A-			2	4	4		1	
B+		2		2	3	3	4	2
B	6	5	1	2	3	1	1	
B-	4	3	1	1		1	2	
C+			6			2	1	
C						1		2
C-						1		3
0								

2回目では2名が1回目より高い評価を得ているが、3回目には2回目の最低評価であるB-からさらに低いC+評価を得た学生が6名と半数を超えた。逆に、3回目には2回目で最も高かった評価よりさらに高いA-を得た学生が2名いた。このことから3回目は半数以上の学生には難しかったと思われる。

3回目から5回目までは最低の評価はC+、B-、Bと上がっている。最高の評価は5回目で下がっているものの、3回目から5回目まではレポートの作成能力が向上した学生が多いと見ていいのではないだろうか。

6回目から8回目までの最高評価は変わらないが、最低評価は6回目で5回目より低い評価であるC、C-評価の学生が1名ずつ現れる。この最低評価は5回目までに出現していた最低評価よりも低い評価である。このことから6回目のレポートも半数以上の学生には難しかったものと思われる。

7回目では最低評価はC+に上がるが、8回目では6回目と同様にAが最高評価、C-が最低評価となる。この8回目では上位グループと下位グループに分かれ、中間層がいなくなったことが特徴的である。

評価の変化で特徴が見られた3回目、6回目、8回目について個々に見る。

3回目は1、2回目が自分の体験について説明するだけであった課題が、自分のアイデアを出し、理由付けをしなければ論構成が成り立たないものとなった。評価が下がった学生のレポートはアイデアが書いてあるだけで理由付けがされていない、アルバイトで感じた評価方法の不满を説明するだけで、新しい評価方法の提案がなされていない、といったものであった。2回目より評価が

上がった学生は、自分のアルバイトの評価でいいと思ったところの説明や改善点の説明などを行っている。このことから、2回目までの単なる説明のレポートから、理由付けのレポートを書くことへと発展させることに留意できたかどうかで差が出たと言える。

6回目は環境保護対策を1つだけ挙げ、それを詳しく説明するというように、焦点を一つに絞って書くのが課題であった。しかし、レポートの中には対策を列挙し、説明が不足しているものも多く見られた。また、アイデアがなかったのか、自分の言いたいことを日本語で表現しづらかったのか、インターネットなどで調べた情報の引用に終始しているレポートもあった。八若(2001)は韓国人日本語中級学習者の読解材料からの情報使用について、読解能力上位群は読解材料から有意に多くの情報を使い、読解能力下位群は上位群に比べて読解材料のコピーを有意に多く使い、言い換えを少なく使うことを明らかにした。このことから、学生が言いたいことを読解材料や自分で集めてきた材料をうまくレポートに引用できるかどうかがこの回のレポートの出来を左右したと言える。

8回目で評価が低かったレポートは①「報道される側に立って報道すべきだ」といった一般的な漠然とした提案しかされず、報道される側に立つとは具体的にどうすることなのかについての説明が不足している、②知らない人から勧誘の電話がかかってきた、といった体験を説明しているのみで、その体験から情報流出対策について述べる際に論の飛躍がある、③7回目までは段落に分けてレポートが書けていたにも関わらず、この回だけは段落分けをしていなかった、の三種類に分けられた。扱うテーマが具体的なものからより抽象的なものへと移るにつれ、「具体的な説明」が困難になった学生が多かったと考えられる。

5-2 まとめ

今回のレポートでは経験の説明とその理由付け、書きたいことの絞込み、アイデアの具体的な説明といったことができていたレポートがいい評価を得ていたことが分かった。このことから、課題に応じて適切なレポートが書けるようになるためには、課題に何が求められているのかを考えさせる時間を与えたほうがよいように思われる。今回はレポート作成時間を出来るだけ長く取るために、レポートの書き方の説明を30分以内に行った後、すぐにレポート作成作業に入った。しかし、数分でも課題の内容を教室全体で吟味する時間があれば、

説明不足や理由の欠如といったレポートが減るのではないだろうか。さらに今回は特に強制をしなかった論構成作成を出来るだけ書かせれば、課題で求められていることと自分が書いていることとの隔たりが意識できると思われる。その上でなお、テーマによる影響を受けやすい学生には、レポート返却後、論構成を再度考えさせ、論構成を意識させていくべきであろう。宮谷(2001)が指摘するように、談話構造に関する知識を書く過程と結びつけて指導することが上級学習者にも必要で、レポート作成には効果的であると考えからである。

今回取り上げたテーマは、学生の評価が下がった3回目は意図的に難しくしたが、6回目は大きいテーマを扱ったため、できるだけ身近に感じられる課題にしたつもりだった。8回目も、学生の身近なものとして感じられるような課題を出したのだが、いずれもこちらの意図とは逆に、難しい課題となったようだ。衣川(1997)が指摘するように課題の指示文がレポートの出来を左右するので、課題の提示方法により配慮すれば、評価が下がる学生が少なかったのではないだろうか。6回目で扱った環境問題のようにテーマが広いものは環境問題の中でも大気汚染に限定するなど、ある程度絞ったほうが書きやすいと思われた。

6. おわりに

今回分析の対象とした学生のレポートは課題の影響とテーマの影響により評価が変化していた。前回と同じような課題(意見文、説明文など)を与えた回は評価が上がっていることが多かったが、違う種類の課題を与えたときは、書くときに留意すべき点を説明していたにも関わらず、前の課題の書き方と同じ書き方をして評価が低くなる傾向が見られた。課題が前回と同じ種類のものでも、話題、テーマが理解しにくいもの、理解できても課題で求められている対策やアイデアが浮かびにくいものは評価が下がる傾向にあった。

このことから、話題や課題の取り上げ方について再吟味する必要があると思われた。今回は身近な話題からより一般的な話題へと移行させたが、身近な話題に限定し、その中で内容を難しくするという方法も考えられる。身近なテーマから身近でないテーマに移行させていくのであれば、その際の落差を感じさせないためにはどうすべきか、またそれらをどう提示すべきかについて再考すべきである。

また、レポート作成の前段階でテーマに興味を持ち、レポート課題の説明を

十分に読み込めれば、論構成の評価はある程度高いと思われた。従って扱ったテーマについて知識や興味がない、意見が持てない、といった学生をある程度のレポートが書けるようにするためには、記事の内容を的確に把握させるだけでなく、記事の内容についてのディスカッションを活発にさせる必要がある。他の学生の意見を聞くことで自分の意見が持て、その意見を深めることができると考えるからである。

学生のレポートには少なからず間違いがある。その間違いをすべて直すと、学生は受け取ったときに間違いの多さに驚いてしまうだろう。中には書く気がなくなってしまう学生もいるかもしれない。宮原（1998）が指摘しているように、「学習者の意欲との折り合いをつけ」、学期が終わるまで積極的に書けるように配慮することが必要である。その上で、上記の点に留意させ、よりよいレポートが書けるようになればと考えている。

今回分析の対象としたデータの数が11と少なかったため、今後もデータを集め、より一般化する必要がある。さらに、集めたデータについては今後質的分析を行い、一人一人の学生のレポートを書く能力の変化を分析していく予定である。また、レポート評価を専門教員などにもしてもらい、評価の違いをみることにより、学部留学生を対象とした日本語の授業で扱うべき項目について多角的に考察したい。

〈付記〉 この研究は教育研究推進支援経費（学長裁量経費）の助成を受けた。

参考文献

- 金森由実（2005）「上級レベルの作文指導—表現形式を中心とした指導の効果—」『大分大学留学生センター紀要』2号 pp.1-17
- 衣川隆生（1997）「作文の課題によってどのように文章産出過程が変わるか—上級学習者の場合—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第12号 pp.89-104
- 八若壽美子（2001）「韓国人日本語学習者の作文における読解材料からの情報使用—読解能力との関連から—」『世界の日本語教育』11 国際交流基金日本語国際センター pp.103-114
- 三牧陽子（1995）「『専門日本語』教育—ニーズと位置づけ—」『大阪大学における日本語教育』大阪大学留学生センター pp.18-26

宮谷敦美 (2001) 「談話構造分析を活かした初級作文指導の可能性」『岐阜大学留学生センター紀要』 pp.17-30

宮原 彬 (1998) 「中級後期から上級段階にある学習者の作文の問題点—作文教材作成のための類型化の試み—」『長崎大学留学生センター紀要』第6号 pp. 1 -23

注

- 1 「専門日本語」を三牧 (1995 p.18) は「専門分野の研究活動あるいは受講に必要とされる」と定義している。
- 2 発表の評価項目は発表の仕方を説明した際に学生に示した。評価項目をグループ評価と個人評価に分け、グループ評価は「発表時間、序論・本論・結論の明確さ」を、個人評価は「話す速さ、声の大きさ、言葉の聞き取りやすさ、内容の分かりやすさ、発表の工夫の程度」を各5点満点で評価した。
- 3 月・木と火・金の授業題目は同じであるため、ここには筆者の名前を入れたが、開講されている題目名には教員名は入っていない。

(留学生センター講師)